

連携先世界遺産：比叡山延暦寺 「お山」の魅力を探る・伝える

比叡山に伝わる数々の「伝説」と、比叡山内にある伝説の舞台を、スライドや散策動画としてYouTubeで発信。伝説の紹介を含む境内Mapも作成。

■受講生

五味涼真 廣瀬大樹 小畑彩織 河村隆佑 杉谷百香（京都文教大4年）、原田真ノ介 吉田太智（同3年）、今井瑞希 神谷源 嶋岡未祐 田口晴那 山本奈々未 渡邊優芽（同2年）、岡和田薫（京都外国語短期大2年）、岩田直人 小川貴大 寺田圭吾（京都先端科学大4年）、田中未来（同2年）、黒川壘輝 松崎侑多 宮川慶彦（京都産業大4年）、大瀧舞子（佛教大2年）、内山知哉 塩見幹太（龍谷大3年）

■担当教員

手嶋英貴（京都文教大学・総合社会学部・教授）

活動目的・概要

京都ではむかしから、たんに「お山」といえば比叡山のことをさすほど、その存在は都のひとびとにとって近いものでした。法然や親鸞、栄西、道元、日蓮など、こんにちの仏教宗派の祖師たちが若き日に学んだことで「日本仏教の母山」ともよばれています。この授業では、比叡山延暦寺から課題をうけ、お山がもつ魅力を現代の大学生ならではの視点から探っていきます。

今年度は、昨年度に続いて、比叡山に伝わる数々の「伝説」を現代的なメディアを通じて発信するプロジェクトを実施しました。3つの作業班がそれぞれタイプの違った制作物を作ることになりました。第1班は、YouTubeで公開することを前提に、比叡山の伝説の地を散策する様子を中心にした動画コンテンツを作成しました。第2班は、同じくYouTubeで公開する動画として、より詳しく伝説の中身を伝えるスライド形式のコンテンツを作りました。第3班はパンフレット形式の「伝説ガイドマップ」を作成し、比叡山を訪れた人たちがスタンプラリーを楽しみながら伝説の舞台をめぐるためのツールを提案しました。



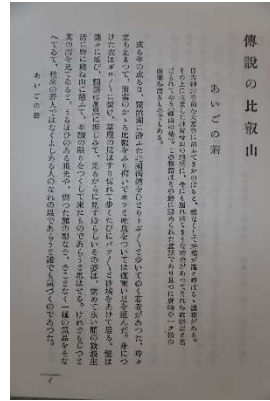
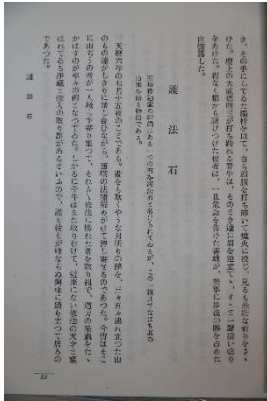
◆主な活動

- 2020. 10. 10 総合ガイダンス、比叡山の伝説に関する資料の共有
- 2020. 10. 24 延暦寺でのフィールドワーク
東塔・西塔・横川の各地域に散在する伝説の舞台を訪問。写真・動画素材の収集と、歴史的知識の習得。
- 2020. 10. 31 フィールドワークで得た情報の整理、3班に分かれての制作作業スタート

- 2020. 11. 21 班ごとの制作作業、進捗状況の全体での共有
- 2020. 11. 28 班ごとの制作作業、動画編集ソフトによるコンテンツづくり
- 2020. 12. 5 動画コンテンツの仕上げ、および成果発表動画の撮影
- 2020. 12. 13 キャンパスプラザでの成果発表

活動の成果

ステップ① 比叡山の様々な伝説を知り、紹介方法・メディアを決める



まず比叡山の大きな歴史を講義形式で学び、次いで山内に残る伝説を集めた文献をもとに、様々な伝説の具体像を確認しました。用いた文献は、1928年刊行の『伝説の比叡山』（近江屋書店）で、旧字体・旧かな使いで書かれていました。文体も古めかしく、これを理解して、やさしい現代語に直すことに一苦労でした。しかし、古い書籍だからこそ、過去から受け継がれた貴重な情報が詰まっており、それを現代に蘇らせる意義があると実感できます。この本から、6～8種の伝説をピックアップし、3つの班それぞれで出されたアイデアによって現代メディア化することになりました。

ステップ② 比叡山にある伝説の舞台を訪れ写真・動画・情報を収集する



比叡山の中に散在する伝説の舞台となった場所を実地に訪れ、取材をしました。まず広大な比叡山の境内を区分する東塔・西塔・横川、それぞれの中で、伝説の地がどこにあたるかを推定します。その上で、各班がイメージする成果物に合わせて、写真や動画、文字情報など多様な素材を収集しました。後から「もっと撮っておけばよかった」と後悔しないように、なるべく多くの視覚情報を採集します。また、撮影に際しては、多数の参拝客がおられる中、顔が画面に写りこまないよう配慮しました。

ステップ③ 各班で集めた視覚資料・文字情報を活用して成果物を制作する



各班の成果物制作においては、自分たちが収集した素材を組み合わせるだけでなく、インターネット上の著作権フリー素材（音源・画像など）を柔軟に取り入れました。また、映像編集ソフトAdobe Premier Elementsを使い、テロップやナレーションの追加を行います。どのようにして、視聴者に分かりやすい映像や音声にするか、班ごとに試行錯誤を続けました。紙媒体であるマップ制作では、携帯しやすい大きさとしてA5版を選び、そのスペース内でもっとも見やすいページ構成となるよう工夫しました。

活動を振り返って

プロジェクトを通じて学んだこと

- ・映像の編集やナレーションの追加を行う過程で、見てくれる人に分かりやすく、魅力的な情報にするにはどうしたらよいか、それを考えながら映像作品をつくる姿勢とスキルが身についた。
- ・よいナレーションをするには、台本となる文章をわかりやすく書くことが大事だということがわかった。また、聞き取りやすいナレーションの発音をすることが、思ったより難しいことも、実体験を通して知ることができた。
- ・伝説の情報が集められた書籍は、戦前の古い文体で書かれていた。まずそれを現代の日本語に直すことから始めたが、この作業を通じて、伝説の中身を細かいところまでしっかり理解することができた。
- ・情報は詳しくれば良いというわけではなく、それを受け取る相手の状況や立場をよく考え、それに合わせて短くしたり、簡単に表現したりすることが大事だと考えた。そうしたバランスをとることで、同じ情報であってもより良い形で受け取ってもらえることがわかった。

担当教員からのコメント

今年度の「お山の魅力」クラスは、コロナの影響で本来の春学期スタートから、秋学期スタートに変更を余儀なくされました。そのため、授業開始から成果の取りまとめまでおよそ2カ月というインテンシブ・コースになりました。さらに、今回は映像編集ソフトを使った動画制作が含まれており、編集ソフトを操作できるようになるまで、いくらか時間がかかりました。それでも、履修生たちは高い柔軟性と情報収集・整理能力を発揮して、それぞれに魅力的なコンテンツを完成させてくれました。

惜しむらくは、延暦寺の広大な境内のうち、メジャーなスポットを散策・調査するにとどまったことです。今回紹介できなかったもので、よく知られた伝説はいくつもあります。「比叡山の伝説を収集・発信する」というアイデアを、名目通りに実現するまでには、さらに多くの現場を訪問取材し、紹介することが望まれます。それでも、お山の多様な伝説の一端に触れることで、学生たちにとっては、比叡山の歴史と文化の厚みを実感する貴重な機会になったことと思います。ぜひ今後も、プライベートでお山に登って、さらに多くの伝説の舞台を訪れてほしいと願っています。（手嶋英貴）



活動資料

お山の伝説(例)

1. 椿堂のはじまり(西塔)

最澄上人が道場をひらく以前に、聖徳太子が比叡山へやって来たことがある。ふもとからお山を見あげた時、山のはしに何かが光っているのを見て、お供の二、三人をつれて山道をよじ登ってきた。そしてある清浄な地を見つけたため、そこに一つお堂を建てて、太子の守り本尊である如意輪観音さまをまつた。

そして、太子は持っていた椿の杖を地面に突き立てて、お山とともに末ながく栄えるように願った。その杖は大きな椿の木になって多くの葉をつけ、いまでも椿堂のそばに茂っている。

2. 白山の姫神さま(東塔・明王堂)

お山の南にある修行場「無動寺谷」を開いた相応和尚(831年～918年)の話である。ある日、根本中堂のお薬師さまから、南の峰に清浄の地があるというお告げを受けた。そこに不動明王をまつた道場を建てたいと思い、山道を歩いていた。すると、とつぜん高貴な女性が現れた。

和尚はおどろいて言った。「このお山は最澄上人がお寺を建てて以来、女の人は登山をかたく禁じられています。あなたはどのようにしてここにいるのですか」

女性は答えて言った。「私はただの女ではありません。白山(石川県・岐阜県)の姫神です。この峰に、多くの人を救う不動明王が現れると聞きました。他の山から来た、いわば『客人』の身ですが、その手助けをしたいと思って来たのです」

そう言うや、姫神はたちまち姿を消した。その後、和尚は念願の道場を建て、「無動寺」となづけた。そして何年かたった時、夢にあの姫神が現れた。「あれから久しく待っていましたが、あなたから、お招きがありません。なんとか私の望みをかなえてくださいませ」

夢からさめた和尚は、さっそく無動寺に小さな姫神のお社を建て、山菜をとってお供えした。そのお社は、今でも無動寺谷の本堂・明王堂の脇にある。また後には、お山のふもと、日吉社の境内にも、白山宮がつくられた。これは客人である姫神のお宮であることから、「客人宮(まろうどぐう)」とも呼ばれている。

3. 三面大黒さん(東塔・大黒堂)

最澄上人がはじめて比叡山にのぼり、道場を建てるにふさわしい場所をさがしていたとき、大黒さまが現れてこう言った。「あなたは仏教のとうとい道場を建てようとなさっている。私が守護神となって、その志をおたすけしよう」

これをきいた上人は、申し出に感謝しながらも、すこし心配なことがあつてこう言った。

「このお山は『一念三千』のことばにちなんで、いつかは三千の坊さんが修行する場所にしたいのです。大黒さまは一日に千人を養う大力の神さまということですが、それでも三千人を養うのには、力不足ではないでしょうか」

それを聞いていた大黒さまは「ならば三倍の力をもって見せよう」とばかりに、たちまち三つの顔と六つの腕をもつ姿に変身してから霧のように消えた。その恩にむくいようと、上人は三面六臂の大黒さんの像を刻み、お山の守護神として大切にまつた。

4. 割れた護法石(西塔・釈迦堂)

天暦6(952)年の初夏の夜、浄蔵と修入という二人の僧が、釈迦堂の前庭で神通力の対決をした。黒山の人だかりが取り巻くなか、二人は最初、じっとして動かない。すると浄蔵の念力により、大きな庭石が突然動きだし、二人の周りをびよんびよんと飛びはねた。すると修入が「これこれ、そうぞうしい。少ししずかにしておれ」というと庭石はぴたりと止まった。

それから一方はこの石を動かそうと念じ、また他方はこの石を止めようと念じつづけた。二人が白熱の対決をくりひろげるうち、庭石は中ほどから二つに割れてしまった。それから、釈迦堂のそばにあるこの石は、今でも二人の霊力がこもっているとされ、仏の教えをまもるという意味で「護法石」とよばれている。